

会長就任のご挨拶



会長 林田 光祐

このたび井上章二琉球大学農学部教授の後を継ぎ、日本海岸林学会の会長に就任いたしました。

研究会からスタートした本学会は今年で 20 年が経過しました。初代の故中島勇喜会長をはじめ、歴代会長ならびに会員の皆様が築いてきた本学会は、これまで海岸林に関する研究と社会貢献に多くの実績を積み上げてきました。今後もこれまでの実績や本学会の特色をふまえた学会の運営をさらに進めていく所存です。しかし、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大は私たちの生活に甚大な影響を及ぼしており、学会活動も例外なく「新しい生活様式」に合わせた活動を求められることは必須です。そこで、これを機に本学会の 20 年間の活動を振り返り、今後の活動様式を見直す議論を始めたいと考えています。この場を借りて、今後の学会運営のあり方に関する私見を述べさせていただき、今後の議論につなげたいと思います。

本学会の最も大きな特徴は、海岸林という「現場」で起きている現象や課題を異なる分野の研究者や技術者が異なる手法や視点で議論することで、多面的な視点を共有し、現実的な解決策を探求することが可能であることだと思います。これを実現するために、毎年、大会を地方で開催し、現地検討会を実施しています。この現場での議論を楽しみに大会に参加されている会員の皆様も多いと思います。この現地検討会を含む大会は、現地の海岸林を評価し課題を議論することで、学術的な支援や啓発活動として開催地域に貢献するという使命を果たしています。そのため、この大会開催の方針を変える必要性はないと考えていますが、これまで通りの開催は今後困難になると予測しています。幸い小さな学会ですので、移動制限が出されてなければ、三密を避ける工夫次第で現地検討会を今後も開催できる可能性はあると考えています。同時に実施している研究発表会も同様ですが、最近のように総会やシンポジウムを合わせて 1 日で行うタイトなスケジュールでは困難だと思います。現地検討会と絡めたシンポジウムは同時に開催する必要がありますが、会員による研究発表会はオンラインを利用した発表と質疑応答で実施することを検討してもよいのではないかと思います。いずれにしても、多くの会員の皆様の知恵と発想を集めて新しい大会運営を考えていきたいと思っています。

学会のもう一つの重要な役割が一定の水準をクリアした研究を論文として掲載して広く公表することです。海岸林学会誌はこの 20 年間で 156 編の論文を掲載しました。年間 8 編程度の掲載数は決して多いとは言えませんが、会員数や大会での研究発表数が毎年 20 件程度であることから考えると妥当な数字かもしれません。ただ、ここ数年の掲載数の少なさは学会の存続を脅かしています。また、昨今の電子ジャーナルを含む学術雑誌の高騰化は大学や研究機関の財政を圧迫していることから、論文を掲載する場として学会誌を自ら確保しておくことは今後ますます重要だと考えます。そのため、学会および投稿者の費用負担を軽減し、編集委員会の負担増にならない学会誌の発行方法の再検討も必要だと考えています。例えば、学会誌の発行を年 2 回から 1 回に減らす代わりに、受理された論文は簡易電子版として会員のみ速やかに公開するなど、会員の不利益にならない方法を模索したいと思います。

会員の皆様のご意見をこれまで以上に聞く機会を増やし、学会の発展に取り組んで参ります。なお一層の積極的な参加とご協力をお願い申し上げます。

山形大学農学部 教授